

Ⅱ 文法的な知識を活着させる試み

——国語教育法の実践的研究——

酒 井 為 久

1. はじめに

本稿は、昭和48年9月30日に名古屋市教育館で行なわれた、全日本国語教育学会名古屋例会の語法指導分科会において発表提案した内容をもとにして、書き直したものである。例会当日の研究主題は「言語意識をどう育て高めるか」であり、私の提案題目は「文法的な知識を活着させる試み」であった。

2. 口語文法の

「現代国語」における扱い

高校では、言語に関する知識を豊かにすることで言語意識を高めることになるとは思います。その中心的なものは文法的な知識であるといえます。口語文法については、中学でその全体を取り扱い、高校では口語文法はすでに理解しているものとして復習的に扱う程度であります。また「現代国語」の授業時間も多くありません。その一方、「古典」が始まりますので、文語文法の指導の中で、口語文法を復習することにもなります。

そこで、私の提案は、現代文の科目である「現代国語」の授業における文法の扱いということに限定し、さし木を活着させるように、文法的な知識を読解や思考の中に活かす工夫をしたことを中心にしたのであります。その前提として、本校2、3年生と併設されている附中3年生の口語文法の知識の程度を、二種類のテストで調べてみました。（本稿では紙面の都合で、問題と結果を省略）その結果は、高校生と中学3年生とではほとんど差がないといえそうであり、文語文法の知識の支えを抜きにしてみると、高校生になり学年進行につれ口語文法を忘れていくのではないかという経験的な見方の裏づけになるとは思いますし、また、高校では口語文法をほとんど扱わないことの表われであると受け取ることができます。

そうした状況の中で、口語文法の知識を活着させるための「現代国語」の授業を工夫し、実施しているわけですが、それを整理し図式的にまとめてみると次のようになります。

(1) ことばを品詞分類する授業 単語の場合

- 教材 (1)50～80の単語 (2)品詞分類表
(3)国語辞典の凡例の中の品詞に関する部分

これには2時間程度をあてています。口語文法の復習というねらいを持ちますが、同時に文法の基本的で体系的な考え方を理解させようとしています。教材として、転成した品詞に属する単語や品詞の識別が困難であったり、使い方によって別の品詞に属する単語を50～80語用意します。それに、品詞分類表と国語辞典の凡例の中の品詞に関する部分を使います。

授業の過程は、単語を品詞分類する作業が中心ですが、分類が困難なもの、分類を誤ったものをそれぞれ検討します。分類の基準は品詞分類表によることにしており、検討の間に文法の基本となる大筋の体系的な考え方を理解させ、復習します。その上で、国語辞典の凡例の中の品詞の扱い方と比較し授業を終えます。

過程 (1)単語を品詞に分類させる。

(2)分類が困難な語・分類を誤った語について検討する。

(3)分類の基準につき、品詞分類表を使ってその体系的な考え方を説明し、文法の基本となるところの復習をする。

(4)品詞分類表と国語辞典の凡例の中の品詞に関する部分とを比較させ、その相違点について理解を深め、品詞分類された結果としての辞書の価値を知るようになる。

その結果、文法的な考え方が身についたかどうかを評価する、よい方法がありませんので、授業の実際がねらいに沿っているのかどうか判断しかねるのですが、予測できる範囲内のことで判断しますと、「考察」というところにまとめましたように、授業において扱う扱い方に変化をもたせておくということにつきます。その際、辞書を教材に加えることは、文法学習の動機づけとしても有効だと思われました。

考察 口語文法を取り扱う場合、次の三点に留意する必要がある。

(1)説明を中心とする扱い——基本的なところを精選して徹底的に

(2)練習を中心とする扱い——応用的な問題を生徒の作業として

(3)例語集を使用する扱い——全部暗記させるのではないということをはっきりしておく

(2)ことばを品詞分類する授業 文章の場合

教材 (1)教科書の読解教材の一部分
(2)動詞・形容詞・形容動詞・助動詞の活用表、例語集および助詞の単語集

過程 (1)文章・文を品詞に分解させる。
(2)分解が困難な活用語・付属語を中心に、既習の文法知識を整理し、読解を一層明確なものとするよう活用していく。
(3)語の活用や意味とは別に、各品詞のもつ文中の役割りや機能についてまとめ、文節の働きについて復習する。

時間 合計して2時間程度

(指導例) (1)副詞の呼応関係を含む文・文章を取り上げる。
(2)接読詞の使われている文章の一部分を取り上げる。
(3)文末表現に特色のある文・文章を取り上げる。
(4)敬語がでてくる文・文章を取り上げる。
(5)省略や倒置のある文・文章を取り上げる。

次は、文章を取り上げた場合の授業であります。教材として教科書の読解教材の一部分を使いますが、詩や小説のように文章が練ってあり、ことばが選ばれているものの一部分の方が有効ですが、それを品詞に分解するという単純な作業を行ないます。いわば、単語感とでもいうべきものを育てるねらいがあり、活用のところや付属語を重点的に復習することになります。同時に、各品詞の文中や文章中における機能や役割りに注意し、読解に応用していけるような説明を加えておきます。

授業は、文法の授業というより特色ある表現のところを取り上げて読解する授業の形態をとりますが、指導者としては、文法の復習を兼ねるという計画性をもたないとうまくいかないようです。読解の中でのことばの学習という平凡な授業ですが、年間計画の中で実施すれば効果が大きいと思います。しかし、そこまでの試みはしておりません。

(3)非文学教材の読解について

ねらい 論説文や説明文等の非文学教材を読解するにあたって、筆者の段落意識に沿った形式段落を重視して、効率的に読解する方法の指導についての実践研究を行なうこと。

経過 このことについて、45年10月の附連高校部会第12回研究大会で次の題目で研究発表した。その継続である。

「現代国語」教材の取り扱い面からの考察
—段落重視の読解における問題—

(指導省略案)

(1)200字ぐらいの段落

「指示」この段落の意味・内容から考えて、中心的な働きをし、段落を代表する語句(キーワード)を2分で見つけ抜き出す。

「発問」(生徒各自が抜き出した語句を板書し)これらの語句を比較し、どれがより中心的なものかを考え、理由をはっきりさせて答える。「助言」

「説明」体言・用言・接続語・指示語等の文法的な説明をする。

(2)500字ぐらいの段落

「指示」この段落は長いので、各自で中心的と思われる語句を3~4箇所ずつ、2分以内で抜き出す。

「発問」抜き出した語句を、各自で結びつけたり比較したりして、考え、より中心的なものを一つ残す。「助言」

「説明」一つ残す過程で、文法的な知識を利用してそれを裏付けとして使用できるよう指導する。

結果 (読解能力の向上 段落意識の涵養)

教材の難易度と読解方法 高2の場合

250字以下の段落 上記(1)の方法

300字以上の段落 上記(2)の方法

参考 中学・高校の国語を中心とした発問の諸問題(酒井)

名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要16集 46年3月

さて、非文学教材の読解についてですが、論説文や説明文等を読解するにあたって、筆者の段落意識に沿っている形式段落に重きをおいて効率的に読解していけるよう、文法的な知識のうち必要なものを動員していこうとする授業であります。方法としては、一貫して、段落ごとのキーワードを抜き出す作業をさせるだけのことですが、その際の理由づけの一つとして、口語文法の基本的な知識をできるだけ利用するようにします。

それを授業の型として簡略に示したのが、指導省略案です。200字ぐらいの段落と500字ぐらいの段落の場合に分けてあります。その中の、指示・発問・説明等とあるのは、参考のところに題名が記してある研究でまとめた、指導者の言語技術としてそのように区別するのがよいと考えることに従ったのであります。時間を2分程度に区切るということが大切であって、それで正答率が低いものは内容がむづかしい教材であり、逆に高いものはやさしいので、おのずと教材は限定されてきます。

経過のところに書きましたように、以前、教科書教材の調査と指導実践をして研究発表したものの継続発展として、口語文法の復習を加味してきたのですが、実践の結果として、およそ、250字～300字の段落で本校の高2の1学期の場合、指導省略案の(1)の方法と(2)の方法に使い分けるのがよいように思われます。条件として、筆者が段落意識をはっきりもって書いた文章であるのはいうまでもありません。

文法的な知識としましては、体言・用言・接続語・指示語等の働き・役割りや、主語・述語・修飾語の関係などが必要でありまして、それらの復習自体にはさして時間をとらないのですが、キーワード抜き出しの際にくり返し応用する練習が大切になります。そうして、読解能力の向上と段落意識の涵養を旨とするのですが、直接の実践記録が添えてないのでわかりにくいかと思ひます。私のまとめ方としまして、授業実践の中から、多くの授業に共通するものだけを選抜することにしたことを申し添えます。こうした試みの根底には品詞中心の口語文法の扱いがあり、それは文語文法の扱いと共通するといえそうであります。(注1)

3. 口語文法教材の検討

以上の三つの授業を並べてみますと、これは、単語・文・文章にそれぞれ対応するものであり、目新しい試みであるとはいえませんが、文法的な知識を重点的に基本となるところから選んで扱うところに特色があるといえましょう。そういう意味での文法教材の精選が必要であり、その一事例としての試みに意味があると思うのであります。

こうしたことができるのも、中学で口語文法を勉強してきているという前提があるからです。が実際には生徒に個人差がありますし、高校入試に出そうなところを重点的に勉強しているなど、口語文法の知識が整理されないままであるのも事実です。そこで、高校でも口語文法を扱う必要性が生じているわけです。中学でも、基本的なことから順に教えるという意味の精選は必要だと考えるのですが、入試問題に対応する場合、いきおい安全運転を心がけ、文法の副読本に沿って並

5. 中学全教科書の文法教材題目名

学図	中学校国語一二三 (ことばの学習)	三省堂	中学校現代の国語123	光村	中等新国語一二三 (ことばの窓)
一年	1 ことばの学習にあたって ことばの単位 2 文の組み立て(-) 3 単語のいろいろ 主語になる単語	一年	ことばのきまり(-) 文と文の成分 ことばのきまり(=) 文の成分と単語 ことばの働き(-) 表現と理解のために	一年	1 国語辞典と漢和辞典 2 音声と文字 3 漢語と和語 4 漢字の組み立て

列的、平板な扱いでより多くの知識を教えることになっていきます。

一方、中学の国語の全教科書の文法教材は、資料にその一部を示したように、全体的に見れば学習の順序に工夫がこらされていますが、すべて・残すところなく・くわしくといった傾向が見受けられます。聞くところによると、教科書はくわしく、すべてが載っていないと売れないということですから、文法に関しては参考書的に扱い、基本的で体系的なところから教えていくことも大切になるといえます。

また、教科書の教材そのものに、規範的であるべき文法の記述に多くの差異があることが気になります。一例として、品詞を10とするものと11とするものなどがありますが、もう少し規範性を強めるよう文法そのものを精選する必要があるはしないかと思うのです。私は、便宜的ではありますが、基本的なところと応用的なところを区別すればよいのではないかと思います。具体的なうまい方法は持ち合せていません。高校では、学説の違いをそのまま教えて考える材料にするのもよいかと考えます。(注2)

教材の精選ということがいわれて久しいわけですが教室で教える段階においても、教科書を編集される段階においても、ことばのきまりの精選ということがあまり考えられていない現状におきまして、文法的な知識を活着させる試みを通して考えた結果として、文法の内容にも精選が必要とされるということではめくくりと致します。(注3)

4. 資料

直接の資料としてワラ半紙5枚に印刷したもの、参考資料としてワラ半紙6枚に印刷したもの、計11枚を添えた。この稿では、紙面の都合でその多くを省略したことを付け加えておく。

注1 講師の東京教育大助教授 湊吉正氏の御指摘があったところ。

注2 講師の東京成徳短大教授 安西勉夫氏の御助言があったところ。

注3 参会者から、精選の私案について質問があったが、その時点では持ち合せていなかった。

文法的な知識を活着させる試み

<p>4 述語になる単語 5 文の組み立て(=)</p> <p>二年</p> <p>1 修飾語になる単語 接続語になる単語 独立語になる単語 2 文の成分 文の成分の順序 3 付属語のはたらき(=) 4 付属語のはたらき(=) 5 複雑な文の組み立て 付録 ことばの学習(まとめ) ことばのはたらき一覧表(口語)</p> <p>三年</p> <p>1 品詞の転成 指示語のはたらき 2 文末の表現 3 文章の展開 4 昔のことばと今のことば 5 敬語 付録 ことばの学習(まとめ) ことばのはたらき一覧表(口語)</p>	<p><感動を表わす文章> 付録 ことばの働き・ことばのきまり 三か年学習一覧表</p> <p>二年</p> <p>ことばのきまり(=) 述部のいろいろな言い方 ことばのきまり(=) 述部の言い方と文の組み立て ことばの働き(=) 表現と理解のために <事実をしるす文章> 付録 ことばの働き・ことばのきまり 三か年学習一覧表 活用表</p> <p>三年</p> <p>ことばのきまり(=) 文の構成と文節 ことばのきまり(=) 表現とことばの使い分け ことばの働き(=) 表現と理解のために <考えを述べる文章> 付録 ことばの働き・ことばのきまり 三か年学習一覧表 活用表</p>	<p>文法Ⅰ (一)ことばと文法 (二)意味の まとめり (三)文章をささえるもの (四)文の組み立て (五)単語の種類 付表 口語動詞活用表等</p> <p>二年</p> <p>1 方言と共通語 2 語句の組み立て 3 敬語 4 漢字の音と訓 文法Ⅱ (一)文の成分と自立語 (二)付属語の働き (三)文の構造 付録 指示することばの表等</p> <p>三年</p> <p>1 話しことばと書きことば 2 漢語の働き 3 国語の表記 文法Ⅲ (一)文章の組み立て (二)意図と表現<参考>文 語にはどんなきまりが あるか 付録 文法の学習資料 付表 品詞分類表等</p>
<p>日書 中学国語一二三 (文法の学習)</p>	<p>東書 新しい国語123 (文法の学習)</p>	<p>教出 中学国語一二三</p>
<p>一年</p> <p>1 なんのために文法を学ぶか 文と文節 2 単語(=)自立語 3 単語(=)付属語 文法のまとめ 一ことばの単位 二文と文節 三単語 付表 品詞の分類表等</p> <p>二年</p> <p>1 指示する語句 2 用言の活用 3 文と文との接続関係 文法のまとめ 一文と文節 二文 と文との接続関係 三指示する 語句 四用言の活用 付表 動詞の活用表等</p> <p>三年</p> <p>1 助動詞 2 文章の組み立て 3 助詞 文法のまとめ 一ことばの単位 二文と文節 三文と文との接続 関係 四単語 五用言の活用 付表 助動詞の用法と用例等</p>	<p>一年</p> <p>Ⅰ文章と文 Ⅱ主語・述語・修飾語 Ⅲ接続のことば・さし示すことば Ⅳ活用のあることば Ⅴことばの組分け 付録 文法の学習のまとめ 用言の活用表等</p> <p>二年</p> <p>Ⅰ文章と段落 Ⅱ文の組み立て Ⅲ助詞のはたらき Ⅳ助動詞のいろいろ Ⅴ文のすがた 付録 文法の学習のまとめ 用言の活用表等</p> <p>三年</p> <p>Ⅰ文章の展開 Ⅱ複雑な文 Ⅲ助動詞・助詞・接続詞に相当す る語句 Ⅳ表現のいろいろ 付録 文法の学習のまとめ 助動詞一覧等</p>	<p>一年</p> <p>ことばのきまりⅠ はじめに 1 文章と段落 2 文と文とのつ ながら 3 文のつながり方 ことばのきまりⅡ 1 文の組み立て 2 単語のいろ いろ ことばの学習1~9 付録 ことばのきまり一覧表等</p> <p>二年</p> <p>ことばのきまりⅠ 1 段落と段落との関係 2 文の仕 組みをつかむ 3 指示語の働き ことばのきまりⅡ 1 品詞の性質と働き(その一) 2 品詞の性質と働き(その二) ことばのきまりⅢ 1 品詞の性質と働き(その三) 2 単語の成り立ち ことばの学習1~8 付録 ことばのきまり一覧表等</p> <p>三年</p> <p>ことばのきまりⅠ 1 文章の構成 2 段落の仕組み 3 文と文との関係 ことばのきまりⅡ 1 文末の表現 2 文体の観察 ことばの学習1~8 付録 ことばのきまりのまとめ等</p>